

るも、世に多かるべし、中にも都會の人物は、萬國の言語にわたりて、をのづから訛すくなし、しか
はあれど、漢土の音語に泥みて、却て上古の遺風を忘る、にひとしく、邊鄙の人は、一郡一邑の方
語にして、且てにはあしく訛おほし、されども質素淳朴に應じて、まことに古代の遺言をうしな
はず、大凡我朝六十餘州のうちにても、山城と近江、又美濃と尾張、これらの國を境ひて、西のかた
つくしの果まで人みな直音にして、平聲おほし、北は越後信濃、東にいたりては、常陸をよび奥羽
の國々、すべて拗音にして、上聲多きは、是風土水氣のしからしむるなれば、あながちに褒貶すべ
きにも非ず、畿内にも俗語あれば東西の邊國にも雅言ありて、是非しがたし、しかしながら正音
を得たるは、花洛に過べからずとぞ。○下略

〔世事百談〕方言

漢の楊子雲轄軒絶代語の撰あり、世に楊子方言といへり、わが邦にて近來越谷吾山といふ俳人の物類稱呼をあらはしたり、ある人大和の國の方言をすべいへる諺とて、

てい／＼ござれ、さうはつちや、かたつかけんするゑそまつり、おもふにてい／＼ござれは、歩行の義、あるきてござれと云ふに同じ、さうはつちやは、左様と云ふ詞にて、はつちやは助語のはたらきなり、かたつかは、つまらぬといふ俚語に同じ意ばへにて、かたつかもないなど、もいへり、けんずるは間炊なるべし、中食のことなり、籠耳に、晝食くふこと、人によりてその名目たがひあり、侍は中食といひ、町人は晝食といひ、寺がたに點心といひ、道中はたご屋にてひる息といひ、農人は勤隨といひ、御所方にて女中のことばには御供御といふとあり、又風俗文選の汝村が南都賦になら茶をヤチウと名づけ、晝食を硯水といふともいへり、しかれども勤隨、また硯水、ともに字音の假借なるべし、ゑそまつりは、ゑそは魚の名なり、大和は海なき國にて、神事祭禮ありとも、ゑそなどの海魚の得がたきをもて、肴に酒宴することはなみのことにてなしといふこゝろ